

病気の世界地図・トラベルドクターとまわる世界旅行

第3回「雨の日とインフルエンザ」～タイ・チェンマイ



東京医科大学病院
渡航者医療センター
教授 濱田篤郎

テレサ・テンの訃報

1995年5月、タイのチェンマイで台湾出身の歌手「テレサ・テン」が亡くなりました。死因は気管支喘息だったそうです。日本でも「時の流れに身をまかせ」などの大ヒットで人気の絶頂にあった歌手ですが、42歳という年齢での突然の死は社会的に大きなニュースになりました。

実は、この歌姫が救急車で運ばれた先は私の知り合いの病院でした。後にこの時の模様を病院関係者に聞いたところ、世界中から報道関係者が押し寄せて、院内は大混乱だったそうです。事故死説なども噂されましたが、気管支喘息の発作で亡くなったことは間違いないとのことでした。



テレサ・テンはもともと喘息を持病としており、その静養のためチェンマイを度々訪れていました。この町はタイの北東部に位置する古都で、町の中心部に残る古い城壁が歴史の重みを感じさせてくれます。バンコクに比べて涼しく、また町の中も比較的静かなため、最近では日本人の高齢者が第二の人生を楽しむ町としても人気を集めています。そんな町を彼女は静養の場所を選んだわけですが、彼女が急逝した5月は雨季に入るため、湿度が突然高くなります。それが喘息に悪い影響を与えたのかもしれません。

雨季にインフルエンザが増える？

私が数年前にチェンマイを訪問したのもそんな5月のことでした。知り合いの病院を訪れると、救急外来の待合室に患者さんが沢山並んでいました。病院のドクターに「あの人

「私たちも喘息の患者さんですか?」と聞くと意外な答えが返ってきました。

「雨季には喘息の患者も増えますが、デング熱やインフルエンザの患者も多くなります」
「え、インフルエンザも?」と私は思わず聞き返してしまいました。

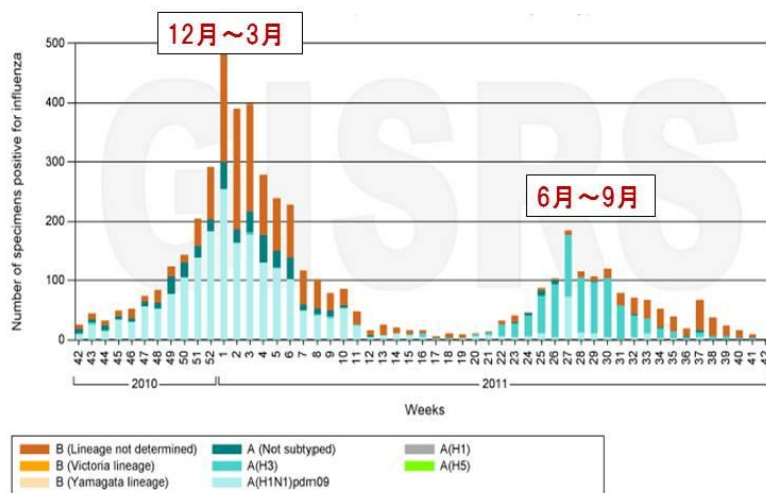
日本には四季がありますが、タイのように熱帯の国では乾季と雨季の二つの季節しかありません。日本でインフルエンザが流行するのは冬の乾燥した季節ですから、熱帯でも乾季に流行するものと思っていましたが、タイでは雨季に流行するというのです。

私の質問に、そのドクターが資料を出して説明してくれました。

「これはWHOのデータで東南アジア全体のインフルエンザ患者数です(図)。この資料をみると東南アジアでインフルエンザが年に2回流行しているのがわかります。一つは12月から3月。これは北半球の流行が波及するためです。そして、もう一つが6月から9月。この時期が雨季の流行というわけです」

「なぜ乾季ではなく雨季に流行するのですか?」と追加質問をすると、ドクターはにやりと笑いながら「それは町にでてみればわかりますよ」と言って、立ち去ってしまいました。

図. 東南アジアでのインフルエンザの患者数
2010年～2011年 (WHOの資料から引用)



雨季の仏教行事

その後、病院をでて町を歩いていると、突然、雨が降り始めました。

それまで青く晴れていた空がにわかに暗くなり、大粒の雨が落ちてきます。バケツをひっくり返したように猛烈な雨が1時間ほどつづくと、その後は何もなかったかのように再び青い空がもどりました。これが熱帯特有のスコールで、雨季というのはこのスコールが毎日発生する時期をさすのです。日本で雨季というと、梅雨時のように一日中弱い雨が降る様子を思い浮かべますが、それとは大きく違います。

ホテルに戻ってびしょ濡れの服を着替えていると、寒さで体が震えてきました。雨季は気温も全体的に低めになるので、このように雨で体が冷えればインフルエンザにかかっても不思議はありません。ドクターが言っていた町に出ればわかるというのは、このことかなと思いました。しかし、雨季にインフルエンザの患者が発生しやすいとして、どのようにヒトからヒトに蔓延するのでしょうか。その謎がとけていません。

夜、ホテルの部屋でテレビを見ていると、「ろうそく祭り」の様子が放送されていました。これはタイ全土で雨季に行われる祭りで、この時期、お寺に籠って修行をする僧侶達を励ますため、ロウソクを奉納する行事です。本来、タイの僧侶は町に出て托鉢などをしながら修業をしていますが、雨季になると寺の中にこもって修業を続けます。これを仏教の言葉で安居（あんご）と呼びます。この習慣は僧侶が雨に濡れるのを防ぐためと言われていますが、雨季には小動物の活動が盛んになるので、その動物たちへの無用の殺生を避ける意味もあるそうです。

いずれにしても、雨季の期間、僧侶達は狭い寺院の中で集団生活をして過ごすことになりますが、これはまさにインフルエンザの流行が起こりやすい環境と言えます。この病気は飛沫感染や接触感染で流行が拡大します。ウイルスは患者のクシャミや咳から排泄されますが、このウイルスを吸い込んだり、あるいは手を介して自分の口や鼻に運んだりして感染が起こります。もし寺院の中に一人でもインフルエンザの僧侶がいれば、周囲の僧侶達は次々に感染してしまうでしょう。

ただ、この感染経路は寺の中でおこる出来事で、一般の人々の生活にはあてはまりません。あいかわらず謎はとけませんでした。

雨でも傘をささない

翌日、私はショッピングモールに傘を買いにいきました。ところが、雨傘を売っている店がなかなかありません。雑貨屋の片隅でようやく折りたたみ傘を見つけて、レジに持っていくと店の主人が「傘が売れるのは久しぶりだよ」と嬉しそうに笑っていました。

実は、タイでは雨が降ってもあまり傘をささないそうです。この店の主人が言うには、その理由が二つあるとのこと。一つは、雨足が強すぎて傘をさしても濡れてしまうから。そして、もう一つは、雨が降っているのは一時間ほどなので、待っていれば雨が上がるから。この二つ目の理由は、日本で忙しく生活している私たちにはなかなか理解できないものです。

たしかに、昨日スコールが降った時、私はホテルに戻ろうとして雨の中をダッシュしましたが、傘をさしている人はほんのわずかで、町の通りは閑散としていました。この間、現地の人たちはどこにいたのかというと、彼らは雨宿りをしていたのです。

そして、この雨宿りこそがインフルエンザが雨季に流行する原因ではないかと気づきました。

雨宿りとインフルエンザ感染

昔の日本にも雨宿りという習慣がありましたが、最近ではその光景をあまり目にしなくなりました。しかし、タイでは雨季になると町のいたるところで、雨宿りをしている人たちを見かけます。雨が降り出すと、軒下や大きな木の下に人々が集まり、そこで雨空を眺

めながら雑談をして過ごします。そして暫くして雨が止むと、皆、それぞれの目的地へと散っていきます。

この雨宿りの間、そこに集まった人々は狭い空間にひしめきあって過ごします。もし、この雨宿りのグループの中にインフルエンザの患者が一人でもいれば、そのグループの人々はこの病気に簡単に感染してしまうでしょう。そして、そこで感染した人がこの病気を次の雨宿りの場所で蔓延させるわけです。これが雨季にインフルエンザが流行するメカニズムだと分かりました。

後日、医学書を調べると、タイだけでなく世界中の熱帯の国々で、インフルエンザが流行するのは雨季であると書かれていました。やはりその原因は、雨を避けて人々が狭い空間でひしめき合っただけからだとそうです。タイでは雨宿りがその主要な感染機会になっているわけです。

ちなみに、日本ではなぜ冬にインフルエンザが流行するのか。これは乾燥しているからではなく、寒いことが大きな原因と考えられています。寒いと外出しなくなり、家の中にこもるから。熱帯の雨季と同じように、狭い空間で人々が隣接して過ごす時間が増えるから冬に流行するのです。

インフルエンザ流行と文化

チェンマイで過ごした最後の夜、病院の関係者が町のレストランで送別会を開いてくれました。インフルエンザについて説明してくれたドクターも出席していたので、声をかけてみました。

「あなたの言うように、町にでたら雨季にインフルエンザが流行する原因がわかりました。それは雨宿りの習慣ですね」

「そのとおり」

「では、雨の日に傘をさすように勧めれば、この国でインフルエンザは減りますか？」

「たしかにそうかもしれませんが、これは私たちの文化なので、習慣を変えるのは難しいですね。雨宿りをしながら、そこに集まった人と言葉をかわすことは、私たちの雨の日の楽しみです。それを禁止することはできません。それよりも、雨季には手洗いをすることや咳エチケットなどの予防対策を指導する方が効果的です」

インフルエンザの流行には世界各地の文化が大きく関係しているのです。

ちょうどその時、レストランのBGMでテレサ・テンの唄が流れていました。彼女もこの町で雨宿りを楽しんでいたのかもしれませんが。